

## 【保育・教育実践ノート】

小学校教員を目指す学生の英語発音への自信を向上させる試み  
 — 小学校外国語活動関連科目における取り組みから —

A Report on the Class of “English Activity in Elementary School”  
 Trying to increase the students’ self-confidence in English pronunciation

金子正子\*

KANEKO, Masako\*

## 1. はじめに

筆者は 2012 年度から、A 大学教育学科において、小学校外国語活動に関わる授業を担当してきた。その授業では、授業力を養成することを目的として 4 人程度の小グループで模擬授業を行わせ、習得したクラスルームイングリッシュを使用しながら授業を展開する活動を学生に行わせているのであるが、学生の英語の発音が、いわゆる「カタカナ英語」であることが多いのが、気になっていた。

その原因として、一つには、同年代のクラスメートの前で「英語っぽい」発音をすることへの照れがあることが推測できるが、それ以前に、どう発音すればよいのか自信が持てないために、「日本語っぽい英語」で済ませているのではないかと考えられた。

確かに現在では英語は International language, Lingua Franca 等と呼ばれ、イギリスやアメリカのネイティブ並みの発音を求める必要はないとされている。学習指導要領でも、1969 年までは、「現代のイギリスまたはアメリカの標準的な発音」と表記されていたが、1977 年改訂版以降は、「現代の標準的な発音」を目指すという表記になっている。

しかしながら、それは、日本人しか理解できないような「英語」でも構わない、ということの意味しない。英語が様々な国や地域の人々とのコミュニケーションの手段として用いられるためには、「相手に通じる」レベルを維持している必要がある。日本人の「カタカナ英語」は、日本人以外には理解することが困難だということは筆者自身もよく耳にする。

2011 年度の外国語活動の必修化以降、優れたデジタル教材も作成され、授業をサポートする教材・教具は整いつつあるが、児童に英語で指示を与え、ほめたり励ましたりするのは、学級担任であることに変わりはない。たとえ ALT がティームティーチングのパートナーとして関わってくれたとしても、授業を進行していくのは、学級担任である。文科省も、指導には、児童をよく知って

いる学級担任が主担当として当たることが望ましいとしている。

2020 年には、英語の教科化も予定されており、学級担任が、「通じる」(intelligible な) 英語が使えるようになることを目指して、教員養成や研修が行われる必要があるであろう。

## 2. 本研究の目的

現在のところ、筆者が授業を担当する小学校教員養成課程に、「音声学」など発音に特化した教科は開講されていない。しかし、筆者の担当する小学校英語活動に関わる授業の中で、たとえ短時間でも発音を扱うことができるのではないかと考え、以下の 2 つの目的で研究を行うこととした。

- (1) 限られた時間内で、効果ある発音指導を行うことが可能なかを、質問紙調査結果の分析から検証する
- (2) 発音指導の結果、受講者にどのような変化が生じたかを、質問紙回答から明らかにし、考察を行う

## 3. 本研究の方法

## (1) 調査対象者

筆者の担当する小学校外国語活動関連科目の受講生で、将来小学校教員を目指す大学 2 年生 55 名を対象とした。調査対象者には、調査の結果を研究に用いる可能性があること、本人が特定されるような使用のしかたはしないこと、また回答によって成績が左右されるような不利益を被ることはないことを伝え、調査協力への了承を得た。

## (2) 調査実施期間

2014 年 9 月中旬～2015 年 1 月中旬

## (3) 調査方法

学期初めと学期終わりに、以下に示す内容の質問紙を

\* 武庫川女子大学 (Mukogawa Women’s University)

用いた調査を行い、回答を分析し、考察を行った。

- ① 事前調査：これまでの発音に関する学習経験と、本人の発音や英語に対する自信や態度を調査した。
- ② 事後調査1：この授業での発音に関する学びの効果と、それが発音や英語に対する自信や態度に与えた変化について調査した。
- ③ 事後調査2：(Ⅰ) 授業で扱った発音課題<sup>1</sup>の学期初めと学期終わりの録音音声の比較による学生本人による自己評価。(Ⅱ) どのような活動が本人の発音の向上に役立ったと感じているかを尋ねた。(Ⅲ) 自由記述で、発音の学びや練習についての感想や意見を書かせた。

#### (4) 回答方法

①と②については、「とてもそう思う」「そう思う」「まあそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」「全くそう思わない」の6つの尺度から該当する回答を選択させる質問紙調査を行った。③については、(Ⅰ)は5段階による回答とし、(Ⅱ)については、①、②と同様に6つの尺度から該当する回答を選択させた。(Ⅲ)の感想部分は自由記述とした。

#### (5) 授業で実施した発音指導

この授業は、授業力、英語力、理論(知識)の3点の育成を柱としており、英語力には、クラスルームイングリッシュの習得も含むことから、発音は、授業全体の6分の1の比重となる。実際、時間的にも、1回の授業で割けた時間は、10分程度であった。

筆者は、10分程度で実効ある発音指導をどのように行うかを検討した。その結果、フォニックス指導と関連づけて行うこととした。フォニックスとは、英語の綴り字と発音との間に規則性を明示し、正しい読み方の学習を容易にさせる方法の一つである。主として英語圏の子供や外国人に英語の読み方を教える方法として用いられているが、日本でも、2015年8月に文科省が2020年からの小学校英語の教科化に向け、アルファベット文字の認識、日本語と英語の音声の違いやそれぞれの特徴への気付きに関する指導の必要性を述べており、将来小学校英語の学習内容となるであろうことが予想される。また、大阪市の小学校のように、すでにフォニックス指導が必修とされている市町村もある。

受講生のほとんど全員が、これまでにフォニックスを学習した経験がなく、実際、これまで接した多くの学生は、英単語は暗記するものと考えており、暗記していない単語は、読めないと言う。フォニックスの規則を知ると、75%程度の英単語はルールに従って読むことができるようになるのであるから、フォニックス学習を発音指導と同時に進めれば、将来小学校教員を目指す彼らに対

し、練習への動機付けになるのではないかと考えた。また、発音指導を綴り字との関係を明示して行うことにより、英語の音に苦手意識を持つ学生の負担を軽減することができると考えた。

授業内に実施した発音指導の概要は表1の通りである。

表1 外国語活動授業内における発音指導の内容

週	指導内容
1	ガイダンス
2	発音課題の録音と質問紙の回答 アルファベットの名前読みと音読みの紹介 母音の発音記号の紹介
3	アルファベット個々の文字の持つ音の練習 発音課題を母音と子音の発音に留意して練習 子音の発音記号の紹介
4	フォニックスジングル(名前読みと音読みの練習) アルファベット個々の文字の持つ音読みのたし算 発音課題を母音・子音・音の連結に留意して練習
5	フォニックス(名前読みの母音)、チャンツ 発音課題を発音記号を確認しながら読む練習(2行)
6	フォニックスジングル(名前読みと音読みの練習) フォニックス(2文字母音)、チャンツ 発音課題を発音記号を確認しながら読む練習(3行)
7	子音(p, b, m, n, l) 調音点と調音法 チャンツ、文のアクセント・リズムを意識して練習
8	フォニックス(rのついた母音) 発音課題を発音記号を確認しながら読む練習(4行)
9	フォニックス(2文字子音, 連続子音), チャンツ フォニックス・ルールのまとめ
10	フォニックスジングルをペアで確認し合う 調音点と調音法を図を用いて説明, チャンツ 発音課題を連音・文のリズム・イントネーションに留意して練習
11	子音(p, b, m, w, f, v) 調音点と調音法 発音課題の練習, チャンツ
12	子音(θ ð, t, d) 調音点と調音法 チャンツ, 発音課題の模範音声の配布
13	子音(s, z, ʃ, tʃ, dʒ) 調音点と調音法 フォニックスジングル, 発音課題の練習
14	子音(j, r, k, g, ŋ, h) 調音点と調音法 発音課題の復習と録音, フォニックスジングル
15	発音課題の事前・事後の録音音声の比較による自己評価, 質問紙の回答

## 4. 結果と考察

### (1) 事前調査の結果

事前アンケートの結果を図1に示した。発音について項目別に学んだことがあるか問うたところ、肯定的な回答をしている者の割合は項目別に( )の通りであった。

(n=55)

母音 (69.1%), 子音 (58.2%), 連音 (63.6%), 単語アクセント (87.3%), 文のアクセント (76.4%), 文のイントネーション (78.2%), 発音記号 (60.0%), 音声器官 (16.4%)。

この数字で見ると、音声器官について以外は、ある程度の指導を受けてきたものと考えられる。もう少し詳しく見れば、単語のアクセントについて指導を受けたと回答した者が最多であり、発音記号や子音の発音について学んだ者は比較的少ないと言えるだろう。

しかしながら、「発音に自信があるか」という問いに対しては、「まあ思う」と回答した者が 10.9% いるのみで、残りの 90% 近い学生は、否定的な回答をしている。

この結果から、それぞれの発音に関わる項目について「学んだことがある」と認識しているものの、結果として、発音に自信を持つには至らなかったということがわかる。

また、英語全般に関して自信があるか、という問いに対しても、90%以上の学生が、自信がないと回答しているが、一方で、英語が好きか、という問いに対しては、58.2%の学生が肯定的な回答をしており、自信はないが、嫌いではないという学生が多く存在することがわかる。

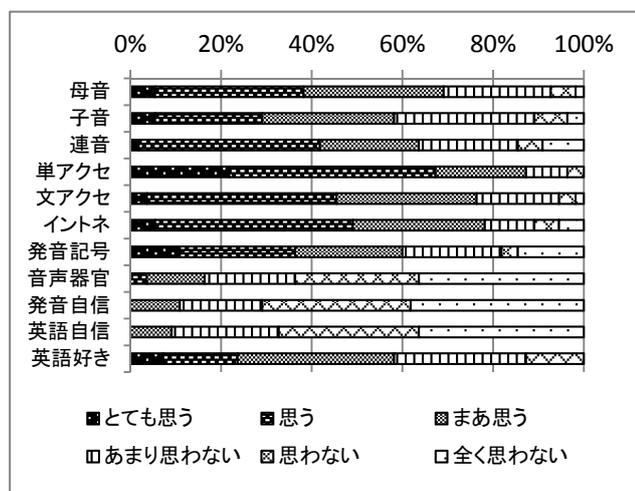


図1 事前調査の結果

## (2) 事後調査1の結果と分析

この調査では、授業を受講して、発音に関わるそれぞれの項目について以前よりよくわかるようになったかどうか尋ねた。また、受講前と比較して、英語の発音や英語全般に以前より自信が持てるようになったか、あるいは、以前より英語が好きになったかどうか尋ねた。結果は図2の通りである。

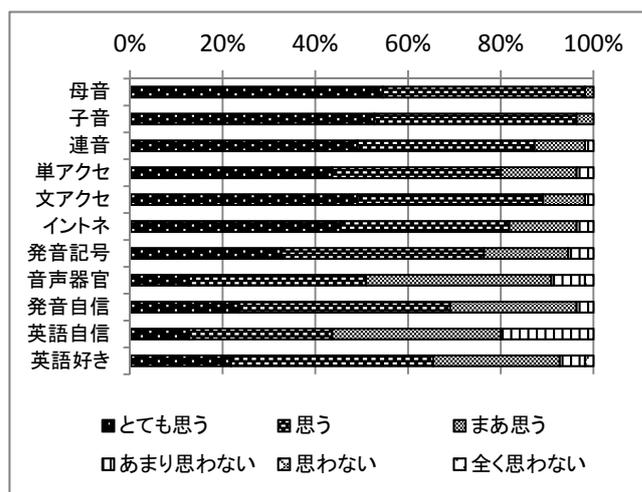


図2 事後調査1の結果

受講生が、以前よりよくわかるようになったと肯定的に回答している割合は、項目別に以下の通りであった。母音 (100%), 子音 (100%), 連音 (98.2%), 単語アクセント (96.4%), 文のアクセント (98.2%), 文のイントネーション (96.4%), 発音記号 (94.5%), 音声器官 (90.9%)。

全ての項目について、90%以上の受講生が肯定的な回答をしている。このことから、90分の授業のうちの10分程度という短時間の指導にもかかわらず、ほとんどの学生が発音指導を受けたことにより、発音についてよくわかるようになったと感じていることがわかる。一回の授業で指導に当てる時間が少なかったとしても、一貫して学期を通して指導を継続することにより、効果を生み出すことができたと考えられる。

また、授業で発音について学んでから、英語の発音に以前より自信が持てるようになったか、という質問に対しても、とても思う (23.6%), 思う (45.5%), まあ思う (27.3%) を合わせて、96.4%の受講生が肯定的な回答をしており、発音についてよくわかるようになった結果、発音に対して自信も持てるようになっていたことが窺われる。

授業で発音について学んでから、以前より英語が好きになったか、という質問に対しても、92.7%の受講生が肯定的な回答をしており、積極的な影響があったことがわかる。

一方、発音を学んでから、英語全般に以前より自信が持てるようになったか、という質問に対しては、肯定的な回答をしている者は 80.0% と、他の項目と比較すると少なめであり、発音に自信が持てることと、英語全般に自信が持てることとは別だと考える者が 20% 程度いることがわかる。しかしながら、80%の学生が、発音を学び、自信を得たことが、英語全般への自信にも繋がったと回答しているということは、やはり、大きな影響があったと言えるであろう。

### (3) 事後調査 2 の (I)

授業で扱った発音課題の学期開始時と学期終了時の録音音声を比較して学生本人が 5 段階で自己評価したところ、55 人の学生の評価の平均点は、学期開始時が 1.8、学期終了時が 3.9 であった。この数字によると、受講生が自分の発音を、学習前は大変低く評価し、学習後は高く評価していることがわかる。自由記述にも、自分自身の発音の上達や変化の大きさに驚いたという感想が多くあった。

学生の自己評価によると、学習により大変上達したという結果になるが、より客観的な評価を得るために、英語教育を専門とするアメリカ人講師にも評価を依頼した。55 人のうちから無作為に選んだ 24 人の学習前と学習後の録音音声の評価をしてもらったところ、平均値は、学習前が 3.1、学習後が 3.9 であった。この事前・事後の発音の評価について分散分析を行った結果、群の効果は有意だった。(F(1, 23) = 87.40, p < 0.5)。よって、客観的な評価から判断しても、発音練習の効果があったと言えるだろう。

### (4) 事後調査 2 の (II)

この調査では、授業内で行った発音に関わる様々な活動について、受講生が、発音の向上に役立ったと感じているかどうか調べた。また、発音の学習をしてから、授業以外でも、以前より英語の発音について意識するようになったかどうかを尋ねた。結果は、図 3 に示した通りである。

まず、以下の活動が発音の向上に役立ったと肯定的に回答した受講生の割合を ( ) に示す。フォニックスの学びと練習 (100%)、発音課題の練習・録音と自己評価 (100%)、発音課題の模範音声 (96.2%)、チャンツの練習 (100%)、子音の調音点や調音法を意識して子音の発音練習をしたこと (100%)。模範音声は、アメリカ人講師による模範音声を学生のスマートフォンに送る形で渡したのであるが、活用しなかった学生も一部いたようだ。他の方法については、100%肯定的な回答という結果だった。特にフォニックスを用いた練習においては、「とても思う」と「思う」の合計が 96.3%と、一番高かった。

発音の学習をしてから、授業以外でも、以前より英語の発音について意識するようになったか、という質問に対しては、96.2%の学生が肯定的な回答をしていた。「あまり思わない」が 3.8%だったが、「思わない」「全く思わない」は、0%であった。ほとんどの学生が授業以外でも発音について意識するようになったことがわかる。

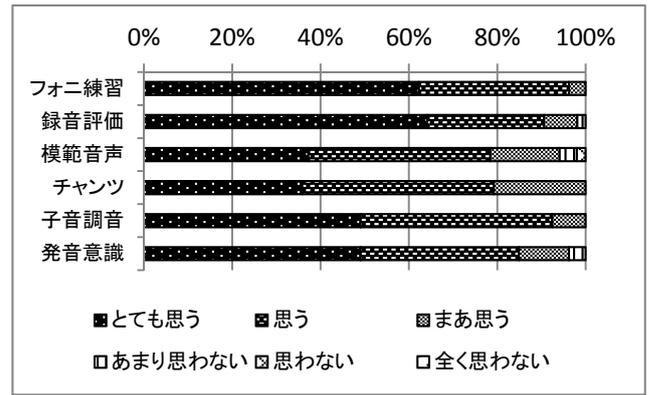


図 3 事後調査 2 の (II) の結果

### (5) 事後調査 2 の (III)

この調査では、授業で行った発音についての学びや練習についての感想や意見を受講生に自由に記述させた。受講生の記述を以下に分類して整理してみる。

事後調査 1, 2 の (I), 2 の (II) の結果により、限られた時間内であっても、効果ある発音指導を行うことは可能であるということが示された。それでは、受講生は、この授業を受講して、どのように感じていたのであろうか。以下に受講生の感想や意見を挙げながら、考察を行っていく。

- ・今までは音の出し方が全然分からず、自信も全くなかったけど、今では音の出し方は分かるので、自分で練習することが出来るし、少し、自信がついた。将来、子どもたちの前で英語をしゃべる不安が少しなくなった。
- ・発音が良くなりたいたいと思いつつもどうすれば良いか分かりませんでした。正しい英語を耳で聞き、はじめは真似る、それを次は母音、子音、連音、アクセントにこだわったり、考えたりしながら話すことで自然と身につけていく感覚があり、楽しかったです。
- ・これまで発音についてここまで意識した事はなく、受験などで記号は勉強したという程度でした。しかし実際に発音は頭で考えるのではなく、自分の声に出して口で覚えなくてはならないということを実感しました。
- ・今まで数多く英語の授業を受けたが、発音は教えてもらったことがなかった。自分の発音に自信がなく、人前で発音するのがすごく嫌いだったけど、今は少し自信がついた。練習を分かりやすく解説してくれたので舌の使い方や口の開き具合もよく分かった。
- ・中学・高校の授業ではあまり発音について学習せず、カタカナ英語をしゃべっている状態だったので、授業での取り組みは自分にとって大変意味のあるものでした。
- ・学期初めは発音に自信が全くなかったため、音声ファイルを聞いても小さい声でボソボソと言っていた。

これらの記述を読むと、事前調査の結果では、ある程度の発音指導を受けたと回答した者が半数以上いたにも

かかわらず、その内容は、受験のための勉強の一部として勉強したという程度のものであり、具体的、明示的な発音指導ではなかったと考えられる。そのため、「発音が良くなりたいたいと思ながらも、どうすれば良いかわからず」、「自信もない」状態で、カタカナ英語を話していた、あるいは、発音に自信が持てなかったため、人前で発音するのが嫌いで、小さい声でボソボソと言っていた、というのである。

それでは、本授業での発音指導を受講生はどのように評価しているのだろうか。

- ・最初は発音の仕方も発音記号もわからなかったが、授業で発音を A～Z まで母音と子音との発音方法を教えてもらい、フォニックスを学んだり、チャンツを歌うなかで次第に発音の仕方がわかってきた。
- ・毎回の発音練習がとても役に立ったと思います。口のどの部分をどういう感覚で使うかなど、とても細やかな指導を受けたことがなかったのです。今回、基礎の基礎から学ぶことができ、とても力が身についたと感じます。
- ・ **make you** を「メイクユー」と読まず、「メイキュー」と読むことでスムーズな英語に聞こえる等、具体的なアドバイスのおかげで発音も上達できたのではないかと思います。
- ・ **Writing** は好きだが、**Speaking** や **Listening** が苦手だったので、自分から進んで学ぼうとすることを極力できてきたため、発音を重点的に授業で行ってくれてとても勉強になった。少しアクセントを強めたり、子音を注意したりするだけでとても良い発音になっていくことに感動した。
- ・毎授業、必ず発音の練習があったので、沢山練習をする機会があり良かった。

これらの受講生の意見から、具体的なアドバイスや指導が役に立ったことがわかる。また、「毎授業、必ず」継続して練習することが大切だと感じていることが窺われる。フォニックスの規則を学び、文字と音の関連性を意識しながら発音の練習をしたことも理解の助けになったようである。

それでは、発音の練習をフォニックスと関連づけて体系的に行い、自己評価をしてみて、どう感じたのだろうか。

- ・自分の前と後のものを聞いてみて別人みたいだったし、すごくスムーズになっていたのが驚きました。
- ・最後の時に、以前の自分と比べはるかに上達している自分がとても誇らしく思えた。
- ・もともと発音 (reading) は好きだったので、そこまで変わらないだろうと思っていたけれど、音声を聞き比べて本当に驚いた！発音の知識を学んだり、正しく繰り返ししたりすることで上達することを知りました。キ

レイな発音になったなあと自分でも思います。

- ・発音は練習すれば上達する！ということが身をもって経験できたと思います。
- ・受講生たちは、音声を聞き比べることにより、自分自身の上達が明確にわかり、驚いたり、誇らしく思ったりするとともに、「発音は練習すれば上達する」ということを経験することができたと言っている。筆者は、このような経験こそが大切であると考えます。
- ・今までずっと英語には苦手意識があったが、この授業を通して英語の発音を重点的に学ぶことができ、英語を話してコミュニケーションをとるということに関しては楽しめるようになった。
- ・発音がわかってくると、話すことが楽しいと感じられるようになりました。
- ・きれいな発音でしゃべれるようになって、外国の方とたくさんしゃべれるようになりたいなとつくづく思った。
- ・無意識に発音よく英語を言ってしまうようになった。
- ・英単語ひとつひとつのアクセントの位置や、どこをつなげて読むかなど学ぶにつれて、自分の声も大きく変化していた。英語というものが今までよりも好きになれた。

受講生が、発音に自信が持てるようになるに従って、声も大きく出せるようになり、精神面でも、英語を好きだと感じるようになり、コミュニケーションを楽しめる気持ちになってきているのがわかる。

- ・この授業で発音について意識するようになってから、普段英語 (外来語も) を使うとき、少しだけ気にするようになりました。興味を持ち始めたと確実にそう思います。
- ・模擬授業では、発音を意識している人は、よく伝わってきた。

本稿の初めに、学生が模擬授業で使用する英語の発音がカタカナ英語で気になると書いたのであるが、発音に取り組み続けたことを通して、受講生が模擬授業で使用する英語の発音にも意識を向け始めていることがわかる。「照れ」を超えて、クラスで発音への取り組みが共有できたとしたら、発音指導の積極的な効果であると言える。

授業開始から 10 週目頃からは、ペアでフォニックスジングルをするときも真剣に耳を傾け合っていたり、授業後もチャンツを口ずさんでいたり、と音を意識して楽しんでいる様子が教室内で見られた。

## 5. むすびと今後の課題

英語は日本語と比較すると、音声構造や音韻的特徴がかなり異なっており、外国語として限られた時間で習得するには、乳幼児でない限り、明示的な発音指導が必要

であると筆者は考えている。本稿では、限られた時間内で、効果ある発音指導を行うことが可能であるのか、また、発音指導の結果、受講生にどのような変化が生じるかを、質問紙の分析と考察により明らかにした。

限られた時間であっても、発音指導の効果は大きく、受講者には、積極的な影響が多く見られた。

しかし、受講生の以下の感想にあるように、発音の学習は簡単に身につくものではなく、継続して行っていくなければならないものである。

- ・舌の位置が、日本語とは全く違ってこんな使い方をすると新たな発見がありました。ただ、それは意識するからこそできるのであって、とっさに外国人の方と話すとなると、そこまで気が回らないだろうなと感じました。習得するには相当の練習がいるなと思いました。

教員養成に携わる教員には、小学校教員を目指す学生が継続して発音を学んでいける環境を整える責務があると考えられる。文科省の英語教育の在り方に関する有識者会議は、2014年9月に『グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言』<sup>2</sup>の中で、大学の教員養成におけるカ

リキュラムの開発・改善が必要とした上で、例として、小学校における英語指導に必要な基本的な英語音声学を挙げている。

教員養成カリキュラムの中に一つの独立した科目として英語音声学を設けることができれば、小学校英語教育に有効と考えられる絵本やチャンツなどを教材として使いながら、理論と実践を統合した系統的かつ効果的な発音指導を実施することができるであろう。その結果、より発音に自信を持って小学校英語の指導に当たることのできる教員の養成が可能になると筆者は考える。

—注—

- 1 松香洋子「The fox and the grapes Scene 1」『フォニックスってなんですか?』, 2008, p. 89
- 2 文部科学省英語教育の在り方に関する有識者会議「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告(概要)～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言 [http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352463.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352463.htm)」2014年9月26日